

# 異文化の“引き出し”

話し手 小平桂一 総合研究大学院大学学長

聞き手 梅定娥 総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻



梅——私は、博士論文のテーマとして、「満洲国」の作家・古丁\*1について研究しています。日本の統治下にあった「満洲国」の官吏であった古丁は、大東亜戦争に協力する立場にありましたが、中国人としての葛藤もあり、深刻に悩んでいました。そのことを、2006年の学生セミナーのときに学長にお話ししたところ、たいへん興味を持っていただき、感激しました。そこで、人文的なお考えをもっと詳しく聞きたくて、このインタビューに応募しました。

## 引き出しを開けば話が通じる

梅——天文学者の学長が文系の私の研究を理解しておられます。しかし、一般的には文系と理系の発想は違うと言われていますが。

小平——そうではないと思います。科学が真理を求め、例えば天文学者が「天の文（あや）」をとらえようとする気持ちと、人文学者が「人の世の文」ととらえようとする気持ちは、実は非常に近い。とらえ方、つまりアプローチの方法や使う道具、例えば、理系の道具の数式と、文系の道具の言葉を比べたりするので違って見えるのです。

梅——文系と理系とは理解しあうことができるということですね。

小平——ハワイにすばる望遠鏡を設置する計画を進めていたころ、政策立案に携わる文系の人にプレゼンをしたのですが、最初は話が通じなかった。そこで、誰もが子どものときに体験している星空の美しさへの感激、不可思議さへの疑問といった心の奥底に眠っている「引き出し」の扉をたたいたのです。そうしたら、引き出しが開いて、なぜ大きな望遠鏡が必要なのかという議論ができるようになりました。人間はいろいろな引き出しを持っているから、それを開けることによって話が通じるようになるのです。

梅——自分の引き出しを意識しているかどうかで違ってきますね。

小平——それは、今日ではますます大切になってきています。19世紀は1人の優れた人が大きな発見をする時代でしたが、20世紀になると、マンハッタン計画に代表されるように、トップダウンによる共同研究で大きな成果が得られるようになりました。そして21世紀の現在、非常に重要な問題、例えばエネルギー、環境、人口問題などが山積しています。これらの問題を解決するには、できるだけ多くの人が問題意識を共有するような仕組みをつくる必要があります。議論などを通して多くの人の「引き出し」を開け、ボトムアップで知を結集する時代を迎えたわけです。

## 国家に従う個人の両面性

小平——梅さんが研究されている「満洲国」の問題も、背景には非常に大きな問題があります。理解者を得て、研究チームを組めるようになるといいですね。

梅——学長のいろいろな引き出しの中で、古丁はどんな引き出しに入っているのでしょうか。

小平——国家間の争いの中で、個々の人間として悩む人たちの問題意識です。私がドイツに留学していた1960年代、第二次世界大戦中のアインシュタインとハイゼンベルクの対応のしかたが比較され、物理学者の間で議論されていました。アインシュタインはアメリカに亡命し、原子爆弾の実現に力を貸した。ハイゼンベルクは、ドイツ物理学界の大御所として政府から原子爆弾の製造を命じられ、引き受けましたが結局作らなかったわけです。戦後公開された彼の手紙を見ると、両面の悩みを抱えていた。国のために役に立ちたいが、個人的には大量殺人につながる核エネルギーを開発したくない。しかし、物理学者として真理は極めたかったです。

古丁も似たような立場にありました。当時の日本は、朝鮮や台湾に対しては日本文化を押し付けていましたが、「満洲国」に対しては二文化政策をはじめて適用し、満洲の文化を認めたのです。それは非常に重要な実験でした。「満洲国」は従来の意味での植民地ではありませんでしたが、文化的なケアはまったく行っていません。

このような文化政策の弊害が、かつての植民地であったアジアや中東で紛争を引き起こしています。戦時日本が加害者であったという意識にもつながってくる

問題ですね。

## ぶつかってこそ得られる異文化理解

梅——世界の文化ということでは東洋と西洋との違いが大きいですね。

小平——東洋対西洋という構図はデカルト以来のもので、西洋の進歩主義が主流になってきました。しかし、今日の閉塞感を乗り越えるため、ポスト進歩主義は何かが問われています。2006年11月、総研大ではこれをテーマとしたシンポジウムを開きました。そこで議論されたのが、白黒をはっきり分ける西洋流ではなく、どちらもある程度受け入れる柔軟な東洋的な考え方で、キーワードは「循環」と「共生」でした。共生の例として国際結婚や他国で働く労働者の和やかな姿があげられたのですが、私は「共生とはそんなに生易しいものではありませんよ」と反論しました。

梅——それは、奥様がドイツ人だから出た発言だったのでしょうか。

小平——私は国際結婚をして40年、日々つつがなく暮していますが、そこには日々熾烈な戦いがあるのです。例えば、日本の学校では、いじめが原因で子供が自殺するという事件が多くなっています。ドイツ人の目から見ると、日本には武士道の伝統があるから、自分の名誉を守る一つの手段として、自殺が子供たちに受け継がれているのだという。こんな話題が朝食のときに出てきて、すぐに言い合いが始まる。ですから、国際結婚は決してスタティックではなく、始終ダイナミックなやりとりがあって、それで安定している状態なのです。

国際社会で共生していくのも同じだと思っています。多様な文化や国が表面的に仲良くするのではなく、経済、軍事、市場など各分野での激しいやりとりがあってもよく、そのうえでお互いを認め合うことです。

## 総研大をアジアへの架け橋に

梅——個人が持っている「引き出し」はたくさんあると社会の役に立つと思いますが、総研大生の引き出しをどうやって増やそうとしているのですか。

小平——総研大には学生が交流できる仕組みができています。今は3段階ぐらいで、学生セミナーのような自由に参加できる事業、文科フォーラムのような同じ研究科の中での交流、そのほかいろいろな行事があります。これらの交流は年々さかんになっていて、言い換えると「引き出し」の開け方がだんだん滑らかになってきている。これは大学側のサポートもありますが、結局、いちばん力を持っているのは学生です。それは大変いい兆候ではないかと思っています。

梅——総研大には私のような留学生もいます。学生間の交流はアジア学術文化ネットワークにもつながりますか。

小平——留学生はもともとダブルやトリプル引き出しを持っています。とくに中国や欧米の人たちは、複数の文化圏と接しながら育ってきている。日本人のほうがワンパターンの傾向がある。その意味でも、総研大に留学生が来てくれて、日本の学生と一緒に学ぶことは非常に大切なことです。

ドイツに留学した私にはドイツの引き出しがあり、日独の学生交流にかかわってきました。それと同じように、留学生たちが帰国したら、日本の引き出しを開けてくれるかもしれません。そういう思いもあって、アジアの中での学術文化交流ネットワークは総研大の卒業生から広げていけるのではないかと考えたわけです。

日本文化は、先の戦争で周辺の文化圏に対して大きな借りがあります。そのことを若い人にわかってほしい。それと、アジアの若い人たちがほんとうにお互いに許しあって育っていけるようになるには、政治、外交など現実社会の壁を越えて学問を議論することによって、もっと草の根で戦わなければいけないのだと思っています。

\*1 古丁（こ・てい）（1914～1964）「満洲国」の代表的作家。長春に生まれ、満鉄経営の公学堂、南満中学院を経て、北京大学で学ぶ。左翼から転向してから長春に戻り、「満洲国」国務院に勤めながら文学活動を行う。雑誌「明明」「芸文志」の創刊に携わり、芸文書房を開設。日本文学の紹介に尽力し、大東亜文学者大会に3回も参加。「日本は太陽」（朝日新聞記事）のような言葉を口にしなが「満人」（中国人）の民度を高めようとした。代表作『原野』『平沙』の日本語訳がある。

左：小平桂一（こだいら・けいいち）  
専門は銀河物理学。すばる望遠鏡を実現した功績で世界的に知られる。2001年から現職につき、総研大の新しい道づくりと、全国に分散する学生間の交流に努めてきた。2006年には、国際シンポジウム「アジア地域における学術文化交流ネットワーク」を企画・開催、総研大修士生のネットワークを核にしたいと考えている。

右：梅定娥（メイ・テイガ）  
中国生まれ。アジアでの「満洲国」の位置づけがようやく明らかにされてきたが、現地の人たちのリアクションについての研究はまだ良く理解されているとは言えない。古丁研究は実は現地の人々の目を通しての日本文化の研究である。この研究は日中両国の文化的理解を深め、アジア地域ネットワーク作りにつながると信じている。

